

英 語 科

新指導要領をふまえた指導の試み

高橋 恵亮 倉田 有邦 宮田 学
山田 雄一 伊藤 悟由

〔I〕 総合英語の試み（その2）

1. はじめに

本校においては、昭和54年度高等学校新入生に対し、一年次、二年次と2年間にわたり、総合英語という形で英語の授業を行ってきた。この実践に関しては、一部、本校紀要第25集に報告した。しかし、その内容は具体的指導法を中心としたものであり、総合英語を企画するに致った過程、総合英語の基本的指導法については十分書ききれなかった。そこで、一部重複する部分もあるが、再び総合英語について去年書ききれなかった面を中心に書きたい。

従来から、我々は現行の、読本、作文、文法という英語の分割指導に対し強く疑問を感じていた。それに対する我々の1つの解答が今回の総合英語の試みである。今回の報告においては、我々が強く感じていた現行高等学校英語指導のあり方の問題点、そしてそれを解決してゆく形での総合英語の基本的指導法について述べてゆきたい。

2. 高等学校英語教育の問題点

a. 指導体制

本校においては、従来から英語の指導は、週5単位時間ずつ、つまりリーダー3単位時間、コンポグラマー2単位時間というように、2つにあるいは3つというべきかもしれないが、分割して指導を行っている。そしてリーダーとコンポ・グラマーは、それぞれ別の教師によって指導が行われている。そこで我々がしばしば苦勞することは、仮に私がリーダーの指導にあたっているとすれば、それぞれの言語材料について、「これは、コンポ・グラマーで扱ったのだろうか。」ということである。このことは2人の教師が連携を保って指導にあたるなら、ある程度は克服できるのであろうが、実際としてはあまりできておらず、授業の際に生徒に、「これ、〇〇先生がやったか。」と尋ねるのが現状であると言えよう。

それでは、仮に連携を保っていたとしたらどうであ

ろうか。無論、全然されていない場合よりはよいであろうが、あまり満足すべき情報は得られないであろう。各言語材料について授業で扱ったかどうかはわかっても、その言語材料についてどの程度まで、つまりproductionができる程度までか、recognitionができる程度までか、あるいはこんなことがあるのだぞと知らせた位までかということや、また生徒が実際どの程度まで習得したかというような直接指導にあたった教師の直観がある程度の役割を果たすであろうことを、L S R Wの4技能にわたって連携を保つことは不可能に近いことであろう。また各言語材料について4技能をどのように組み合わせて指導を行っていったかということも、その後の指導の発展という面で大切なことであるのだが、これも非常に難しいと言える。

さらに、高等学校で習得すべき言語材料の膨大さを考慮に入れると、せいぜい各文型・文法項目について「関係詞のwhat はまだだよ。」という程度の情報しか得られないというのが現実であり、複数の教師が効率的に連携を保って指導を行うのは困難であり、その学年の指導を1人の教師が行った場合と比較すると、指導の重複や、さらに悪い場合は指導の欠落、不足といった事態も起こりかねないのである。

b. 教科書

さて複数教師による指導をもたらしているものは、英語の指導を読本、作文、文法と分割した結果である。はたしてこの英語の指導の分割は大きな意義があるのだろうか、このことをテキストの問題とからめ述べたい。この読本、作文、文法という英語の分割指導は、高等学校1年から3年の全学年にわたって効果的と言えるだろうか。高等学校3年というような、高等学校で習得すべき言語材料、特に文型・文法項目については、ほとんど出尽くしている段階においてなら、読本で読解力を、作文で表現力を中心的に養うということは、それぞれ個々の効率的な指導があるはずであるから、非常に意味のあることと言える。

では、1、2年ではどうであろうか。読本、作文の

教科書を見てみよう。それらは、1、2年の全般を通し常に新言語材料が続出しており、中学校において学習したことや、今まで学習してきた言語材料で、それぞれ読解力、表現力を養えるというものではない。結局、生徒は、また同様に教師も、未習言語材料に振り廻されてしまうという結果になっている。読本の教師はリーダーの時間に、作文の教師はコンポの時間にそれぞれバラバラに文法の指導を行い、一方また別にグラマーの授業もあるというのが現状であり、このように教科書の難しさを考えると、読本、作文、文法の分割指導は問題がある。

さらに読本、作文、文法と3分冊化された教科書は、たとえそれらが同じ出版社から発行されている同じ書名の教科書、例えば文英堂なら Unicorn English Readers, Unicorn English Composition, Unicorn English Grammar の3冊であっても、それら3冊は言語材料についてはもちろんその他の面でも関連づけられておらず、教科書は最初からやるというのが通例となり、教科書もそのように構成されているからそうならざるを得ないのであろうが、このような現状では読本、作文、文法の分割指導は一層の指導の一貫性を欠くことになる。

c. 指導法研究

高校英語の指導法の研究について、山家保が1972年、ほぼ10年前に次のように述べている。「中学校の英語の学習指導では、教科でも教授法でも随分と研究が進み、相当の成果を挙げてきているが、高等学校における英語教育となると、いろいろ複雑多岐な問題があり、思うような成果が挙がっていないというのが実状のようである。…(省略)…外国語の指導法となると、最も重要な基礎造りをする初級コースの指導に重点が置かれ、中級コース(intermediate course)以上のことになると殆どなにも言っていないというのが実情であり、このことはPalmerも Friesも例外ではない。」(1)

それでは、この状態が10年後の現在どう変わったかと言えば、何も変わっていないというのが本当のところであろう。一昨年完結した研究社の「現代の英語教育」という叢書に、「英語教授法各論」(2)という一刊がある。内容は、前半各教授法について、オーラル・メソッド、オーラル・アプローチ、グレイテッド・ダイレクト・メソッド、LL、訳読式教授法という観点から述べられ、後半は指導の実際を示すために各指導法による教案と指導について述べられている。その後半部分は、各指導法の相違を示すために教材を同じものとして工夫がなされている。高等学校の場合は、イソップの北風と太陽と旅人の話である“The Gentle Art of Persuasion”を原文のまま、中学の場合はそれをやさしく書き下した“The North Wind And

The Sun”が選ばれている。この点は非常によいのだが、残念ながらすべての教授法が中級レベルの教材、初級レベルの教材の両レベルに対し教案を示している訳ではない。実際はどうであるかと言えば以下の通りである。

初級レベル(“The North Wind The Sun”を教材としたもの)
オーラル・メソッド、オーラル・アプローチ、グレイテッド・ダイレクト・メソッド
中級レベル(“The Gentle Art of Persuasion”を教材としたもの)
LLを用いた授業、訳読式教授法 変形文法を加味した授業

中級レベルつまり高等学校の場合については、オーラル・メソッド、オーラル・アプローチ、グレイテッド・ダイレクト・メソッドは何も指導法を与えてくれない。高等学校の場合の指導として登場するのは、まずLLである。LLを用いた授業というのは、指導法というよりむしろLLというハードウェアの使いこなし方ということである。また変形文法の場合も、「変形文法を加味した(筆者下線)」とあるように指導法といえるほどのものはまだ持っていないといえよう。そこで登場してくるのは、不思議なことに、従来避けるべき指導法として高校英語教育において批判の矢面に立たされてきた訳読式指導法である。結局山家保が高校英語教育における研究の遅れを指摘してほぼ10年になろうとしているにもかかわらず何も状況は変わっていないと言える。

特に、今回我々は総合英語の企画を立て研究を開始したのであるが、その時我々が感じたことは次のことである。確かに読解指導のあり方、作文指導のあり方、文法指導のあり方等、個々の分野については、いろいろな図書、雑誌などに研究された成果が発表され参考となるところが大いにあった。しかし、それでは具体的にリーダーの授業、これは本来総合英語であるのだが、これをどのように展開したらよいかということは何も示唆してくれないということである。現在は高校英語教育では、全くの読解だけ、英作だけというような指導はあり得ず、いろいろな要素が入り混じっており、それらを実際の指導でどのように組み合わせるかということは、現場の教師まかせということなのである。高校英語のごとく教材が高度化したレベルでは、それぞれ単独の読解指導、英作指導、文法指導だけをとりあげても多くの複雑な問題点があるのに、実際の指導ではそれらを組み合わせねばならないということになると一層難しくなり、とても現場だけでは手に負えない状態であると思われる。

d. 現場の英語指導

では、今度は現場の我々の英語指導について考えてみよう。リーダーの授業の目標というのは読解力の養成ということがその中心を占めているのであろうが、その内容はただ読解力の養成だけで済むものではない。読本の教科書について考えてみるなら、その例として Unicorn English Readers (文英堂) をとりあげてみよう。各レッスンの構成は以下の如くである。

レッスンの構成	Points
	Introduction
	本文
	Review
	Exercise
	(Intonation Drill)

Points と Introduction は、各レッスン全体の導入の役割を果たし、Points が言語材料、特に本文に新出する文型・文法項目について、Introduction が内容についてとなっている。一方、For Review と Exercise がレッスンのまとめの役割を果たし、For Review が内容の、Exercise が言語材料のまとめとなっている。さらに Exercise を詳しくみるなら、それは穴埋め、適語挿入、適語選択、書き換えなどいわゆる文法問題、英作文それに発音、イントネーションの問題からなっている。また実際の授業の様子を見ても、単なる読解というだけでなく、発音・音読の練習、単語・連語の指導、文型・文法項目の説明、練習、書き換え、英作文と盛り沢山である。このようにリーダーとは言うても、単に読解だけでなく、RCGの3領域、あるいはLSRWの4技能の指導が複雑にからまっているのである。にもかかわらず、これら4技能3領域の授業における組み立てを考えるとなく、つい教案を書くことも怠りがちになっているのである。

さて、我々の高等学校における英語の指導はしばしば訳読式指導法と言われるが、それは1つのはっきりした目的のために体系的な理論があって生み出されたものではない。我々が古来行ってきた指導の共通部分を集めただけの指導の実態に過ぎないのである。同じ指導法と名が付いていても、はっきりした目的と方法論をもって編み出された、オーラル・メソッド、オーラル・アプローチ、GDMなどとは、訳読式指導法は次元が異なるのである。かつて英語が好きで成績が優秀であった生徒が、大学を、多くは英文科・英米科を卒業し、英語教師になり、彼あるいは彼女自身が高校生時代先生に指導された英語の授業を思い出し、彼あるいは彼女自身の多少のアレンジを加えたものが現在の高校英語教育における指導であることが多いのであ

る。そこには、長期的な見通し、指導の流れの意識、そして今回問題にしている4技能3領域の兼ね合いの工夫はあまり見られないのである。

以上まとめてみよう。

- I. 複数教師による4技能3領域の関連づけのない指導は問題がある。
- II. 読本、作文ともに教科書は非常に難しいものであり、1、2年の間は言語材料面の障害により読解力、表現力を独自につけるとするのは難しい。
- III. 読本、作文、文法の教科書の3分冊化により、4技能3領域の一貫した指導がとりにくく、多くは指導の無駄や不足が生じている。
- IV. 高校英語教育における指導法研究は立ち遅れ、特に4技能3領域をいかに組み合わせるかという面にそれが顕著である。
- V. 現場においても、訳読式指導法という隠れ蓑のもとに、4技能3領域の指導の流れは意識されていない。

3. 総合英語の基本構想

以上の5点の問題認識のもとに、我々は総合英語を企画した。これら5点のうち、総合英語という形をとることにより自然と解消されるものもあるが、多くはさらに工夫が必要とされるものであり以下の基本方針のもとに指導を開始した。

指導体制

1学年の英語の指導は1人の教官があたり、読本、作文、文法の区別を設けずに指導を行う。

教材

総合教科書を使用する。必ずしも総合教科書を使う必要はないが、昭和57年度より施行される新学習指導要領を考慮し、総合教科書を使用することにした。

指導法

高等学校英語指導を複雑化させているものは、教材の高度化であるとし、指導法の工夫にあたっては、この観点から、つまり教材の高度化に対処するにはどのように指導を工夫をしなければならないかという観点から、4技能3領域の相互の関連を重視した指導法を考える。

もう少し詳しく述べてみよう。入門期においては各ターゲット・センテンスそのものが音声教材であり、読解教材であり、表現教材であった。しかし、レベルが上がるにつれて、それらの教材で要求される程

度が異なり始め、ターゲット・センテンスが理解できても、これがそのまま教科書の文章の理解につながらなくなり、別に読解の指導が必要となってくるのである。このことは、4技能3領域のすべてについて言えるのであるが、しかしたとえレベルが上がったとしても独自の指導が必要な部分だけでなく共通の部分は残っている。従来の高等学校英語教育は4技能3領域の独自の指導に目を向けたものであると言えるが、我々は4技能3領域の共通部分に目を向け指導を工夫するのである。

4. 総合英語の基本的指導

3.において述べた方針のもとに総合英語の授業を組み立てたのであるが、具体的に文型・文法項目の指導、読解指導、表現指導、音声指導の4点に分けてそれぞれの指導の方向づけについて述べたい。

a. 文型・文法項目の指導

高等学校や中学校高学年になり教材が高度化するにつれて、そこで扱われるべき文型・文法項目は複雑になり理解するだけでも困難な項目(例えば仮定法)も登場し、生徒の知的発達、英語に対する慣れなどを考慮に入れてもおそらく生徒にとっての困難度は増していると思われる。さらに新出言語材料の量も増加しているのである。高校の読本の教科書を1ページめくればわかる通り、中学校においてなら1つの授業のターゲットとされるような文型・文法項目がそのページに続出している。

そこで我々は文型・文法項目の高度化と、量の増大に対処するために、以下のように指導を行った。

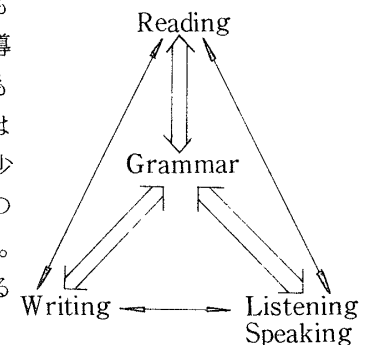
Ⅰ. 文法修得を1、2年の主目的とする。

文法とは人間が言語を使用する際にその背後にある暗黙の知識のことであり、我々が英語を使っている時も英語の文法が存在して初めてそれが可能になるのである。(3) 英語教育においても同様で、Listening、Speaking、Reading、Writingができる前に、文法の知識はある程度形成されていなければならない。そこで、まず1、2年の段階を3年での高等学校英語完成への準備期間であると考えて、文法修得を第1の目標とした。高等学校英語における新出言語材料の量の膨大さ、質の高度化を考えるなら、1、2年の間は文法を重視することはやむを得ないことだと思われる。従来から文法偏重という批判がなされているが、この1、2年での文法の重視というのは3年での読解力、表現力の指導への準備であり、文法のための文法でなく、読解のための文法、表現のための文法であり、その批判はあたらない。

Ⅱ. 文法指導においては、文法指導と4技能間のフィード・バックの関係を多に利用する。

文法を1、2年の英語指導の中心に置いて、教育の場においては文法知識は、Listening、Speaking、Reading、Writingを通して強固なものになるということも見逃せない。

例えば、Readingを例にとるならば、ある1つの文章を理解しようとする場合、その文章の中にある文法はほぼ完全に理解されていなければ、その文章の言わんとすることを正確に理解することは不可能である。一方教育の場においては、その文法項目が実際の文脈の中でどう使われているかを考え、確かめることにより、それを一層深く理解でき、その文法項目の知識は一層強化されることになるのである。つまり、文法指導と読解指導間には互いにフィード・バックの関係がある。このことは、文法指導と表現指導、文法指導と音声指導間にも言える。また同様のことがそれほど強くはないであろうが、Listeningと読解指導についても言える。つまり聴解力がつくことにより、読解力、特に速読力がつき、一方速読力がつくことにより聴解力がつくという関係がある。同様のことがSpeakingと表現指導についても言える。また読解指導と表現指導との関係も全く無関係であるとは言えず、おそらく多少のフィード・バックの関係があると思われる。以上の関係を図示すると、右のようになる。



従来、言語教育はこのフィード・バックの関係を利用し展開されてきたのであるが、いわゆる訳読式指導法というのは、音声指導と文法指導、読解指導、表現指導の関係を利用することなく、もっぱら文法指導と読解指導、表現指導の関係を利用した指導法である。一方、最近の指導は、むしろ文法指導と音声指導の結びつきを重視し、文法知識の形成と音声指導をほぼ同時に行い、後に読解指導、表現指導を行うものであろう。我々の指導もできる限り後者の指導にならう。音声指導を通し文法指導を行うことにし、さらに1つの文法項目について、4技能すべてからフィード・バックが得られるように、文法教材、音声教材、読解教材、表現教材において、それぞれ重点的に扱う文法項目を同じになるように構成した。

Ⅲ. 文法は体系的に扱う

Ⅳ. 演繹的指導を中心に置き、帰納的指導もとりまぜる。

入門期においては、文法は型としてとらえられ帰納的に指導されることが多い。しかし、高等学校に入学し言語材料が高度化し、量も増えてくると、入門期の

ごとく文法をパターンでとらえることは十分な効率を期待することはできず、むしろパターンを整理し数を減らしたほうが効率的であると思われる。その場合、ルールをどのように与えるかということが問題となる。一般には帰納的指導法が望ましいとされるのであるが、日本の英語教育の現状、つまり埋め込み式英語カリキュラム・英語教材、日英語間の言語・文化的距離、高校生の知的発達レベルを考慮に入れると、とても帰納的指導をする余裕はない。それよりも、積極的に演繹的指導の意義を認め、演繹的指導を採用することにより生ずる時間で練習量を増やし、その欠点を解消する方向をもってゆく方が効率的であろうと思う。一方、言語の学習における問題解決的学習は無視することができず、この面を補うために帰納的学習も随時取り入れなければならないと考えた。

V. productionまで要求する文法項目と recognition ができればよいとする項目と区別し指導に生かす。

さらに、この量の増大、質の高度化に対処するために、すべての文型・文法項目を同じレベルで扱うのではなく、それぞれの項目には生徒に期待する程度の違い、つまり productionまで要求する場合と、recognition ができればよい場合とあるはずであるから、それに応じて指導するのである。つまり、むやみに英文をつくらせたり、暗唱させるのではなく、本当に必要な場合だけ、つまり productionを要求する文法項目については表現指導までもってゆき、一方 recognition ができればよい項目については意味がわかればよいという指導にとどめるのである。

b. 読解指導

読解指導においては、言語材料の指導と内容理解の作業を全く切り離して指導を行った。読解の1単位時間では、その前半で言語材料の指導を終え、後半は内容理解にあてるようにするのである。このような指導は、先程の文法指導と読解指導のフィード・バックの関係を考えていないのではないかと指摘される向きがあるかと思うが、それは理由があるのである。日本の英語教育における読解の現状は、これまで非常に不健全であった。我々が授業を行っていて痛切に感じることは、生徒の意識が常に言語材料の方を向いてしまい、内容理解には向かないということである。なかには、文法や構文さえわかれば内容などは関係ないというように、まるで教科書が一応話の続いた例文集のごとく考えているのではないと思われる者もいる。ゆえに、文法と読解の結びつきを意識させるよりも、それを意識させない指導のほうが望ましいのである。言語材料を先に指導してしまい、生徒に文法などは教科書の本文で学ぶのではなく、本文とは習得した文法な

どを読解という言語作業に生かす場であるという意識を生み出させるのである。また、このような形態の授業では、時々見られる本文を最初から読んでゆき、新出文法項目などが出てきたら、本文を離れ文法項目の説明に入り練習を行い、再び本文の読解を続けるというような細切れの授業とは異なり、生徒は本文の内容に集中でき、細切れでない全体の流れにのった読解ができる。しかし、すべての新出言語材料について本文に入るまでに理解させ、練習させておくことは望ましいのであるが、残念ながらそれだけの時間の余裕はなく、今回の実践においては各ユニット(4)で特に中心的に指導したい項目はそのユニットの最初に、一方残った項目の中で重要であると思われるものは、各単位時間の前半に指導を行い、他のものは本文を読みながら指導せざるを得なかった。

c. 表現指導

読解教材は高等学校になると非常に高度なものとなり、言語材料について例え理解できていても、いざ読解をしようとしてもそれらが複雑にからまっておりなかなか容易でない。一方、表現教材はすべての言語材料のうち productionを要求しているものはその基本的なものであることや、短文の英作が多く全体の流れの中で表現することはあまり要求されないということで、読解に比較するならまだ指導がしやすいと思われる。従来から文法指導と表現指導は結びつけられており、文法の教科書に見る通り、文法指導の最終段階に位置づけられていた。我々の指導においても、特に一年次に登場する文法項目は基本的なものであり、ほとんど productionを要求され、文型・文法項目の定着度を増すために英作文は非常に役に立つと思われるので、英作文をもちろん口頭を含め、文型・文法指導に積極的に取り入れた。練習の中で口頭英作文を相当量おこない、文型・文法項目の指導のまとめ、整理の段階で、口頭時の比較的容易な無味乾燥なものでない比較的複雑なものを行った。

d. 音声指導

中学校においては各言語材料は音を通して与えられ、音を通しての練習が授業の中心を占めている。しかしだんだんレベルがあがるにつれて、言語材料が複雑化、高度化することにより、音を通しての導入、練習が非能率的になったり不可能になったりしてくる。また一方では、新出言語材料の数が増加することにより、音を通しての導入、練習は時間がかかることが多く、つい講義調の授業になってしまう。

まず我々は、音声指導の前段階として、高校生位の年齢になると英語を口に出すことを恥ずかしがったり、億劫がったりするという事実に対処するために、あらゆる機会をとらえ、どんなつまらない文のリピートで

もよいからまず英語を口に出して言うことを第1と考えた。そして、文型・文法項目の指導にあたっては、これは練習の効率化をもたらすものでもあるから、できる限り口頭による練習を増やし、最終的には書かせることになるような英作文でも、やさしいものはその前の段階で口頭で定着させてから書かせることにした。

このような指導は音声指導といえるものでなくその前段階としかいえないようなものである。時間の関係でSpeakingに関してはこの程度の指導が限度であるが、Listeningに関しては各文法項目の導入時に音声教材を使いListeningの指導を行った。

5. 結 び

来年度から新学習指導要領が施行されることになった。その中心を成すものは、英語Ⅰ、英語Ⅱの総合英語の登場であろう。その点、今回の改革は非常に多くの問題をかかえている高校英語教育界に望ましい変化をもたらすであろう。しかしこの改革が将来へのさらに大きな変革につながるかどうかは、直接指導にあ

ってゆく我々現場の教師次第なのである。我々が従来の読本、作文、文法の3分割英語指導と同じような意識で、英語Ⅰ、英語Ⅱの指導にあたっては満足すべき結果は得られないであろう。今回の我々の総合英語の指導の実践が、英語Ⅰ、英語Ⅱの指導を工夫する際の参考になれば幸いである。最後に、今回の総合英語の試みの具体的指導については、本校紀要第25集を参考にして頂きたい。(伊藤 悟由)

- (1) 山家 保 『実践英語教育』(ELEEC、1972年) 355頁。
- (2) 小川 芳男ほか 『英語教授法各論』(研究社、1978年)。
- (3) 佐々木 昭 「文法無用論について」(『英語教育』第23巻 第2号)。
- (4) 伊藤 悟由 「総合英語の試み」(『名大附属学校紀要』第25集)。